

今に武蔵野の面影を仄かに残す東京の西隣に所在する新座市、野火止の台上からは黒目川越しに陸上自衛隊の朝霞訓練場を望み、少し俯仰すれば新宿副都心・都庁、東京タワーをも望み得る、右の方に目を転ずれば、冬の日空気の澄みきった遥かなる向こうには逆三角形の富士山がぽっかりと姿をあらわす、勿論夏でも条件が良ければ富士山にお目にかかれぬ訳ではない。富士山を見通す手前には関東の名刹でもあり新座随一の名所でもある平林寺がある。

私が終の棲家としているのはこのような所だ。その割には当市の事を全く知らないで、少し調べてみた。(家族が引っ越して10年になるのだが、今まで住んでいなかったのだから、知らずと雖、許しては貰えるだろうが・・・)

① 新座は「新羅」の末裔の地

4世紀中頃以降朝鮮半島に、百濟、高句麗と共に鼎立した新羅という国があった。三国時代がそうである。大和朝廷の管轄権が関東にも及び始めた大宝律令の公布(701年)以降に、新羅の国から渡来した僧や尼などを現在の新座付近に住ませ、一帯を新羅郡と称した。その後新羅郡は新座郡と改称された。これが新座市の名前の由来である。

明治以降、廃藩置県及び市町村制により10村の片山村との合併、4村の大和田町との合併が行われ、昭和30年に大和田町と片山村が合併し古い地名の新座郡(にいくらごおり)からとり、町名を新座町とした。昭和45年に市制施行である。

新座市は歴史的には、新羅の渡来人の末裔の棲む地である。然しながら、千年以上の歴史を経て渡来系も大和民族もそして蝦夷も渾然一体となっており、且つ最近では都心20km圏内という事もありベッドタウン化しており、渡来人云々という気配は当然の事ながら微塵もない。

② 氷川神社

新座市の地図を見て近い所に氷川神社が3つもあることに奇異の念を抱いて一寸調べてみた。市内馬場には片山郷の総鎮守でもある片山氷川神社が、野火止には、武州里神楽と川越街道の往来を見守る野火止氷川神社が鎮座し、大和田には、創建802年と伝えられる大和田氷川神社がある。

関東には280余りの氷川神社がある。その総本山は、さいたま市大宮区に鎮座する「武蔵国一宮 官幣大社 氷川神社」である。正に氷川神社は武蔵野国の総鎮守、産土の神である。武蔵の国を流れる川から出現した神であり、水稻耕作の豊穰を願って祀られた。出雲より勧請されたといわれる。須佐之男命、稲田姫命等を祭神とする。

新座市の3つの氷川神社も一宮の神霊を分け戴いて奉斎したものと思われる。

③ 平林寺と野火止用水

新座市の中央部は、武蔵野の面影濃い野火止台地であり、そのほぼ中央部には、臨済宗妙心寺派の名刹平林寺がある。

もとは岩槻にあったが、1590年の岩槻城落城の際に焼失した。徳川家康が中興し、川

越城主松平信綱が領内に寺の移建を宿願、その子の代に移建し、菩提寺とした。

平林寺の境内には、今も野火止用水が昔日の装いを取り戻して流れている。この用水は、知恵伊豆と称された川越城主松平信綱の命を受けた安松金右衛門が、承応4年(1655年)完成させた。玉川上水より取水して、荒れた乾燥していた野火止台地を緑豊かな豊饒の地に変えた。この用水は昭和20年頃までは生活用水としても利用されていた。次第に汚染が進んだけれども、復元対策事業により清流が復活し、魚も泳いでいる。

新座の春を告げるお祭りの一つが、例年4月17日に行われる平林寺の半僧坊祭りである。静岡県引佐郡のお寺に随時していた老翁は半僧半俗の容姿で、寺域境内を風水害から守ったといわれる。この老翁の事を俗に半僧様といい、不思議な霊験を持つと考えられ、「半僧様」として次第に信仰され、関東にまで広がってきたものである。平林寺の半僧坊は明治27年に勧請された。小生も2回ほど、孫達を連れてみた事があるが、当日は、稚児行列や伊豆殿のお練り等が催され、露店などが立ち並び、大勢の市民で賑わう。

④ 栗より旨い十三里

川越街道は、中山道の脇街道(脇往還)である。江戸時代には、川越道中または川越往還と呼ばれていた(川越海道と呼ばれるのは明治期以降)。板橋宿平尾で中山道と別れ、上板橋、下練馬、白子、膝折、(野火止)、大和田、(三芳・藤久保)、大井の宿場を経て川越城下に至る。道程は13里であり、川越は薩摩芋の名産地である所から芋の事を「十三里」と言い、そこから「栗(九里)より旨い十三里」との言葉が生まれた。

急げば一日行程であり、これらの宿場には、本街道を利用するのは川越城主のみであるが、参勤交代時等に食事を提供する本陣や脇本陣、公用文書遞送の為の馬継ぎや一般旅人用の小規模の旅籠があった程度である。新座域では、(野火止)と大和田の宿がある。

(参考：百科事典、各種HP etc)